

◇ 12 月の天文暦 ◇

日 時	記 事
1 9	望
7 12	水星 火星の 1.4° 北をとおる
8 5	大雪 (太陽黄経 255°)
8 7	下 弦
11~16	ふたご座流星群
16 11	朔
18 7	月 水星の 1° 北をとおる
18 21	水星 最大離隔 太陽の東 20°
18 23	月 金星の 0.5° 北をとおる
22 23	冬至 (太陽黄経 270°)
24 5	上 弦
30 20	望 皆既月食が見られる

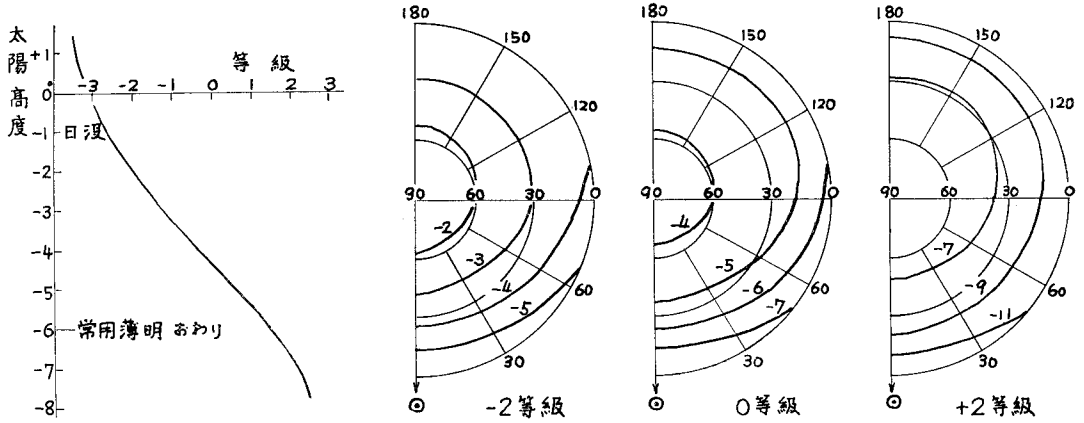
薄 明 の 星

今月から西空に金星が見えはじめる。これからの夕空には、金星のほか、木星、カペラ、ヴェガ、シリウスなど明るい星がでてくる。これらの星が目で見えはじめる

のは、日没後どれほどたってからだろう。ちゃんとした観測値は、じつは手もとにない。ここにしめすものは、その1つの資料である。

図のいちばん左は、横軸が星の等級、縦軸が太陽の地平線から下向きの俯角をあらわす。グラフは、ある等級の星が太陽の俯角なん度から見えるかをしめしている。ただし、ぼんやり見ていたのではだめで、星の大体の位置がわかっているときに、そのあたりをよく探して見つかるという等級である。たやすく見える等級は、グラフの等級より2等級明るいところだ。こまかくいうと、薄明の空は太陽に近い西の方が明るい。またいっばんに、地平に近づくほど見とおす大気層が厚くなる。これらはいずれも星を見えにくくする原因になる。したがって、方向によって星の見えやすさがちがってくる。右側の3図は中心が天頂、周囲が地平線で、見える空の1/2を画いたものだ。太陽は図の下方にあたる。図中の曲線にそえた負の数は太陽の俯角をあらわす。曲線の上にある星は、太陽がその俯角のとき見えはじめる。3つの図は、星の等級が -2, 0, +2 等級のばあいに対応している。

(本年度本欄担当、齊藤馨児、原 寿男)



東京における日出入および南中 (中央標準時)

ⅩⅡ月	夜明	日出	方位	南中	高度	日入	日暮
日	時 分	時 分		時 分		時 分	時 分
1	5 56	6 31	-26.4	11 30	32°7'	16 28	17 3
11	6 4	6 40	-28.0	11 34	31.4	16 28	17 4
21	6 10	6 46	-28.6	11 39	31.0	16 31	17 7
31	6 15	6 50	-28.3	11 44	31.3	16 37	17 13

各地の日出入補正值 (東京の値に加える)

分 分		分 分		分 分	
鹿児島	+36	+48	鳥取	+23	+23
仙台	+4	-1	福 岡	+32	+43
大 阪	+14	+20	青 森	+11	-18
広 島	+26	+33	名 古 屋	+10	+13
札 幌	+16	-28	高 知	+19	+31
新 潟	+9	-3	根 室	0	-46

